

九戸村の民話



目次

民話	オトデの話	1
伝説	高屋敷「助七の乗馬」	7
民話	大石のがっきりじいさん	11
伝説	妻ノ神の河童の話	13
伝説	上雪屋の天狗	17
伝説	弘法大師靈験の話	19
民話	荒谷のきつね	23
伝説	戸田虎舞の由来	25
伝説	首切られ大牛	29
民話	バツタリ沢のキツネ	33
	九戸村に伝わる民話	41
	地域子ども読書会20年のあゆみ	44
	あいさつ	45

表紙絵／松澤則雄
大扉絵／宮澤まひ子
目次絵／上村美雪





昔々、江刺家の折爪岳の草刈り場で村の若者が牛まぶりをしていました。夏の夕日が西の空に沈むころ、若者は藪の中に光る目玉に気が付いたのです。やがてそれが二本の足を揃えて、ピョン、ピョンと跳びながら若者に近づいてきました。大きさは人間の子供くらい、上半身はフクロウ、下半身は人間の様に見えました。

この不思議な生き物は、若者が「なんだべこりや」と思つた「なんだべこりや」と思つているな・ドデン」バケモノだ」と思つた「バケモノだ」と思つているな・ドデン」と、そのまま言葉で言い表しました。

若者が驚いていると、やがて遠のき、藪の中に入って見えなくなつてしまいました。

それから数日たったある日、名主が山の見回りに行くと、その不思議な生き物が道端に倒れていました。名主はたいそう驚きました。動かないことに気付くと、縄で縛って家に持ち帰ることにしました。



名主は持ち帰ったこの生き物を
 庭のすみに置いておきましたが、
 いつの間にか見えなくなり、辺り
 を見回していると、その不思議な
 生き物は、神棚の上に大きな目を
 開いてキチンと座っていました。
 村人たちはこの珍しいものを一目
 見ようと、名主の家を訪れ、山で
 見た若者も来て、「ドテン・ドテ
 ンと大きな声を出していたのがこ
 れだ」と言ったので、この不思議
 な生き物は、ドテと呼ばれるよう
 になりました。

ドテは時々、「明日は晴れた」
 とか「夕方雨だ」とか叫び、それ
 がまたヒタリと当たるので、評判
 となりました。村人たちは、自分
 の運勢や矢せ者、縁談、病気など
 を聞きに次々と訪れ、名主の家は
 大繁盛するようになりました。
 ドテは、毎日天井ばかり見て暮
 らしていましたが、ある日、下を
 見ると名主は羽織袴で座り、村人
 たちはその前で頭を下げ、賽銭箱
 には、お金がたくさん詰まってい
 ました。

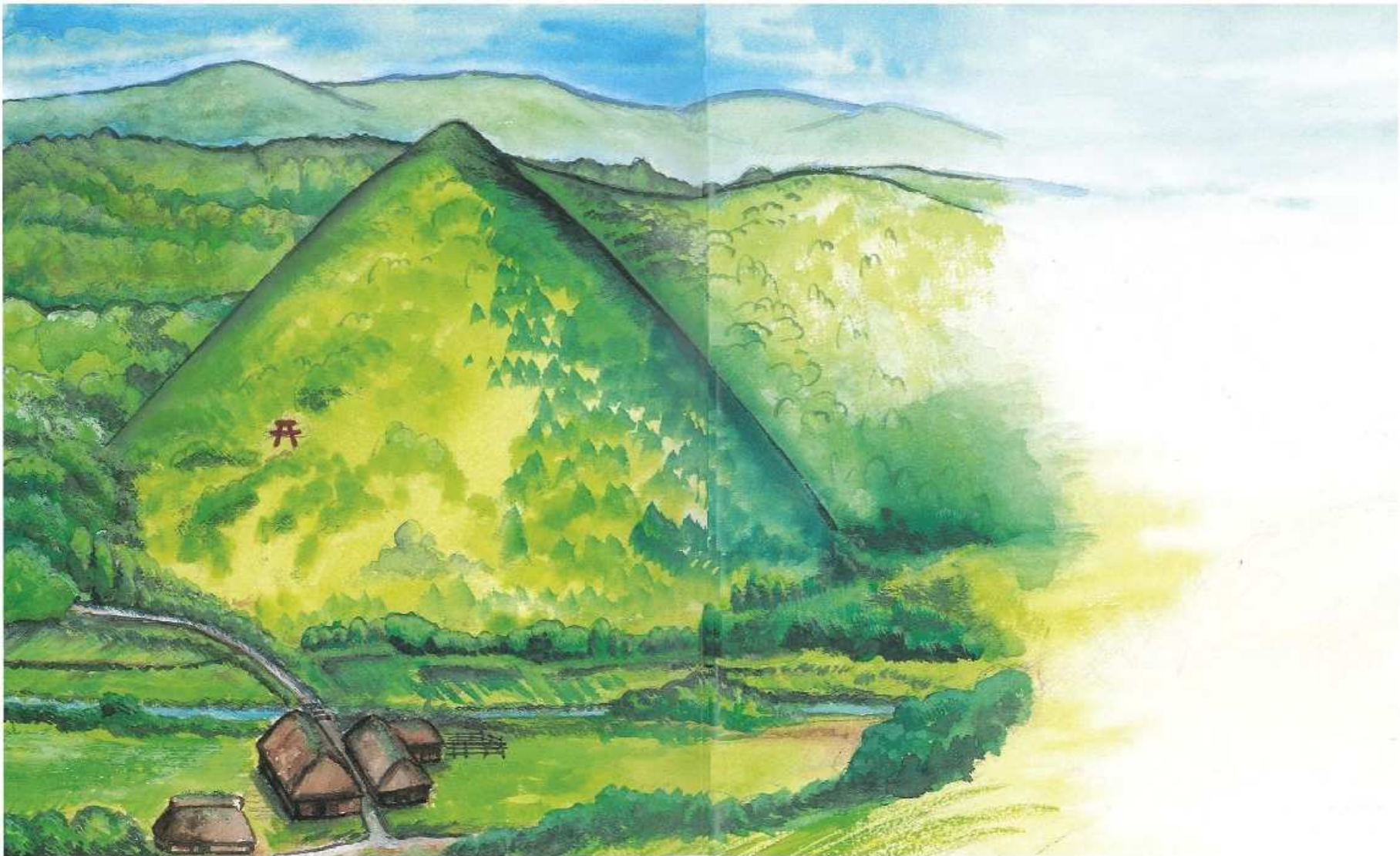


それを見た下子は、突然「シン
ン・シリンン・ドデンン・ドデン」と
叫び、折爪の森深く飛び去ってし
まいました。

それ以来この不思議な生き物は、
「腹と尻姿を見せなくなる」でしたが、
今でも近頃の森でそれらしい声を
聞くことがあぬやうです。それが
「この地がひび蕪びたことを
告げるのだ」といふ噂も
あります。

伝説

高屋敷「助七の乗馬」



昔々、戸田瀬川内、中橋谷一オんのせんきは、代々高屋敷の助七といわれていました。この家は、どの代になっても種馬をかっていました。八代前の助七は、たいそうな力持ちで、朝夕馬を乗り回し、乗馬にかけては、助七が一番だ。村のひょうはんはたいそうなものでした。

ある時、殿様が、りょう内をまわりになり、戸田の泥の木で、休息を取られました。

東の方のすぐ目の前には、形の良い高倉山がそびえ立っていました。

家来たちが「高屋敷の助七という若者は乗馬が見事であり、この辺りではおそろしく助七の右に出るものがないであろう」と、ささやき合っていました。この話が殿様の耳に聞こえたのですから大変です。さあ乗馬の名手である殿様のことですからたまたまってはいません。「これは面白い。直ちに、助七とやらをここに連れてまいれ」と、めいれいになりました。間もなく、家来の一人が、高屋敷の助七を連れてきました。助七は何事であろうかと、おそろむおそろむ殿様の前にまかり出て、ひれふしました。



絵／上村 美雪

殿様が一行の中から、若い馬を呼びよせて「助七とやら、この馬にしりがいをかけないで、高倉山をちよう上まで見事乗りおりしてみよ。でかしたあかつきには、十分ほうびを取らすぞ」と言いつけになりました。

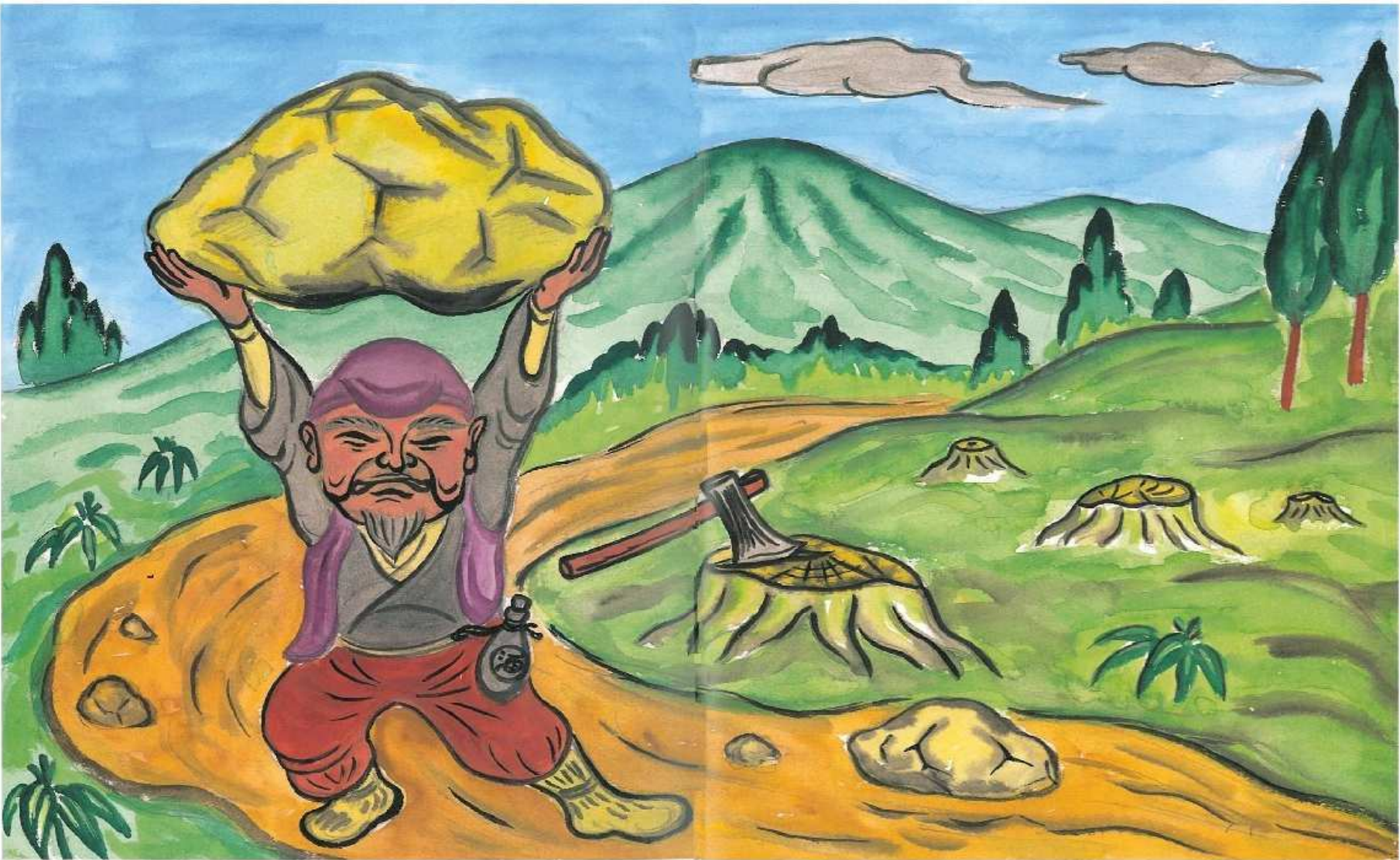
さあ大変、さすがの助七も、いっしゅん顔色を変えましたが、殿様の言いつけをこぼむことはできません。さればこれまでと、かくごを決めました。助七は、あら馬

にしりがいもかけず、馬上ゆうげんとまたがり、馬のたすなをふりしほって高倉山ちようじょうをめぐり、一気に乗り上げ、乗り下がったと言います。殿様は「やあ助七、あっぱれじゃ」とおほめになり、ごほうびとじて、りっぱな太刀ひとぶりに畑二ツ後（二十アール）をやったと言います。

このいい伝えが、今もこの地の語りぐさになって残っています。ドットバライ

※しりがい 馬具の一つで

馬の尾の下から鞍につなく紐



福原 隆
岩田 聖

伊保内の二ツ家に、大石という
屋号の家があります。その家の主
中村初雄さんのせんに、たいそ
うな力持ちのおじいさんがありま
した。おじいさんは大の酒好きで、
庭の前に大石をおき、力だめしを
しては近所の若者にじまん話を聞
かせるのでした。

ある日、おじいさんがたいくつ
になり、大石を道路に運び出して
いたすらをしました。山形村の人
が、馬車を通れず、近くの若者を
七人もお願いして大石を取りのぞ
き、通ったと言います。人をお願
いできないときは、おじいさんに
酒を買って大石を取りのぞいても
らい、通ったということです。

また、力持ちのおじいさんは、
木こりの名人でもありました。い
つも、大志田川上流の山に、まさ
かりをかついで行き、木を切るの
でした。ある時、いつもの沢より
一山向こうの沢で木を切り、帰り
は、いつものように木の根っこに
まさかりをガッキリと切りさして
山を下りました。次の日行ったら、
ガッキリ切りさしたはずのまさか
りが無くなっていたのです。

このまさかりは、根っこからぬ
き取るのに三人もかかってぬかな
ければ取れないのに、だれに持ち
去られたのか、ぬすまれていたの
でした。

それ以来、その沢を盗人沢と呼
ぶようになり、また、その山に
ばかり木を切りに行くので、根切
沢と呼ぶようになりました。トッ

トハラ

伝説

妻ノ神の河童の話



昔々、戸田妻ノ神のとまん中を流れている瀬月内川に、青々とした深い「岩の淵」という淵が二つありました。上の淵には、たちの悪い兄かつばが、下の淵にはやさしい弟かつばが住んでいました。

上の淵の兄かつばは、時々かみをあらう女に化けて、若い男を淵にさそいました。若者が淵に来るとだきあって泳ぐようにすすめ、いったん淵に入ったら最後、男はふたたび水面に浮かぶことはな

ったと言われています。

妻ノ神の大家、福田鉄蔵さんのせんぞは、代々三之丞と呼ばれ、種馬をかっていました。

ある日、三之丞が、上の淵の岸の木に馬をつないで川に入れていました。すると、かつばが、馬のたすなをといて自分の手にくくりつけ、馬を淵に引きこもうとしました。馬がおどろいて、いちもへさんに自分のうまやにはせもどってきました。



絵／馬場 茂幸

かつばは、馬に引きずられてきて
しまい、馬の舟（馬のえさをい
る入れ物）をかぶって、かくれて
いましたが、すぐに三之丞に見つ
かりました。

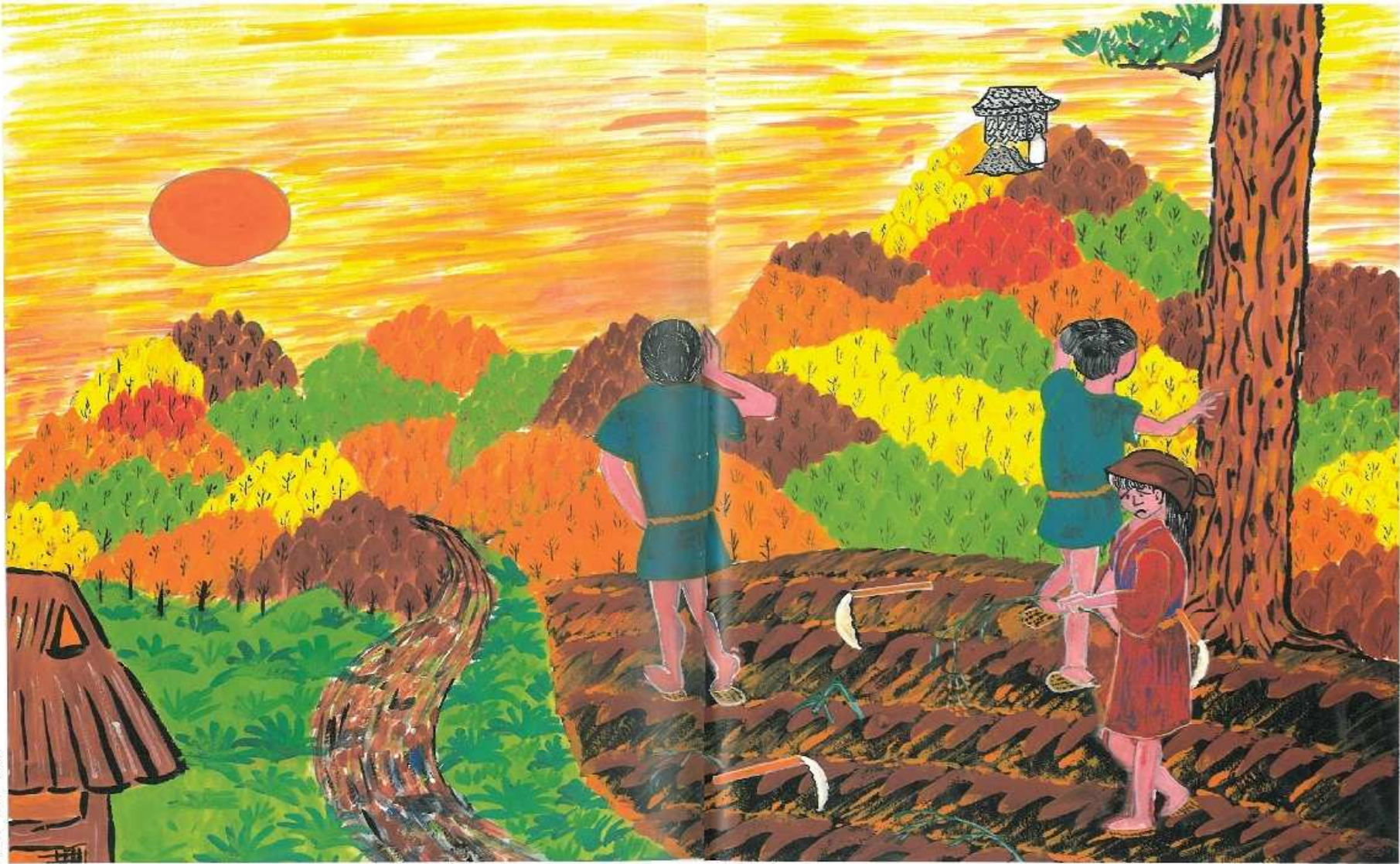
このかつばは、時々人をおぼれ
させ、しりつ玉をぬいていました
から、三之丞は、かつばをころそ
うとしました。これから決してわ
ることはしませんと、かつばは
なみだを流してお願したので、

やっとゆるしてもらいました。そ
の後、この淵で人がおぼれなくな
ったと言います。

かつばは別れをわかれ「これから
は決して悪いことをしません、
大好きな瓜だけは食べさせて下さ
い」とお願いして川に帰っていき
ました。このことがあってから、
瓜が実れば、いつの間にか瓜のし
りがかつばに食われていたそうです。
ドットハライ

伝説

上雪屋の天狗



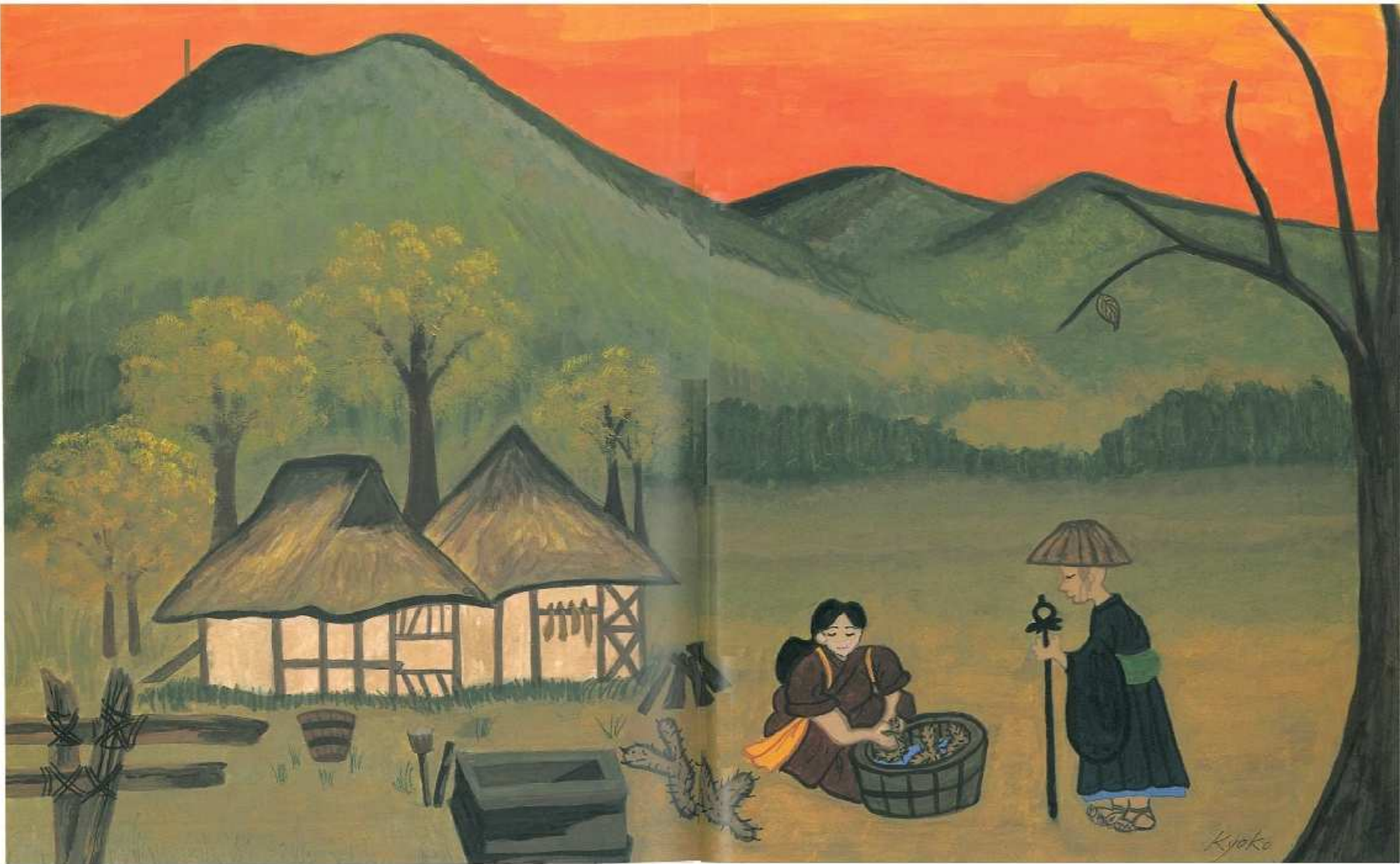
絵／七十 安雄

大雪屋への道に入り、上雪屋部落をすぎると右手に高い天狗山がある。この天狗山に、石のほらがある。

今からおよそ二百年前、夕日が落ちるころになると、山から神楽の笛、たいこの音が聞こえてくるので、村人は不思議でならなかった。村人が、どうしても見たくて、ある日のこと、この山の古い大木のかげに身をひそめあたりをうかがっていた。よくみたら、鼻の長い者がおどっていた。村人は、そ

のあやしい者がどこへ行くか追っていきました。ところが、不思議にもりっぱなごてんの門に消え去った。村人が、ここへ行った後は、神楽の音もとたえ、おとるかげも消えた。そして、作物が年々不作となっていった。

村人は、これは天狗のおいかりにふれたと思い、ねんごろにほらを建て、村をあげてお神酒上をした。それからは何事もなく、作物も平年作によみがえったという。ドットバライ



江刺家は、はなへのお母（手）へくるみ（の産地）として、広く知られています。

実は、このへくるみに井つわゑ、次のような言い伝えがあります。

昔々、弘法大師というえらいおほうさんが、東北の村々を、教えを説いてまわっていた時のことです。

ちやうど折爪岳をこえて、江刺家のある部落にさしかかりました。日はくれかかり、足はつかれ、おながへってきたので、一夜の宿と食べ物ささがし、辺りを見ました。少しはなれたところの井戸は

たで、一人の女の人が、いものようなものをあらっていました。

さっそく、そのいもを少しばかりいただきましたとお願いしましたが、その女の人は、なさけないことに「このいもは、苦くて食われたものでない」と言っつてふり向きもしませんでした。おほうさんは「そうですか」と言っつて、すなおに通りました。

しばらく行くと、今度は一人の女の人が川の流れて、くるみをあらっていました。旅のおほうさんは、また、少しばかりのへくるみをいただきたいとお願いしました。



狐ノ嫁籠 中野村

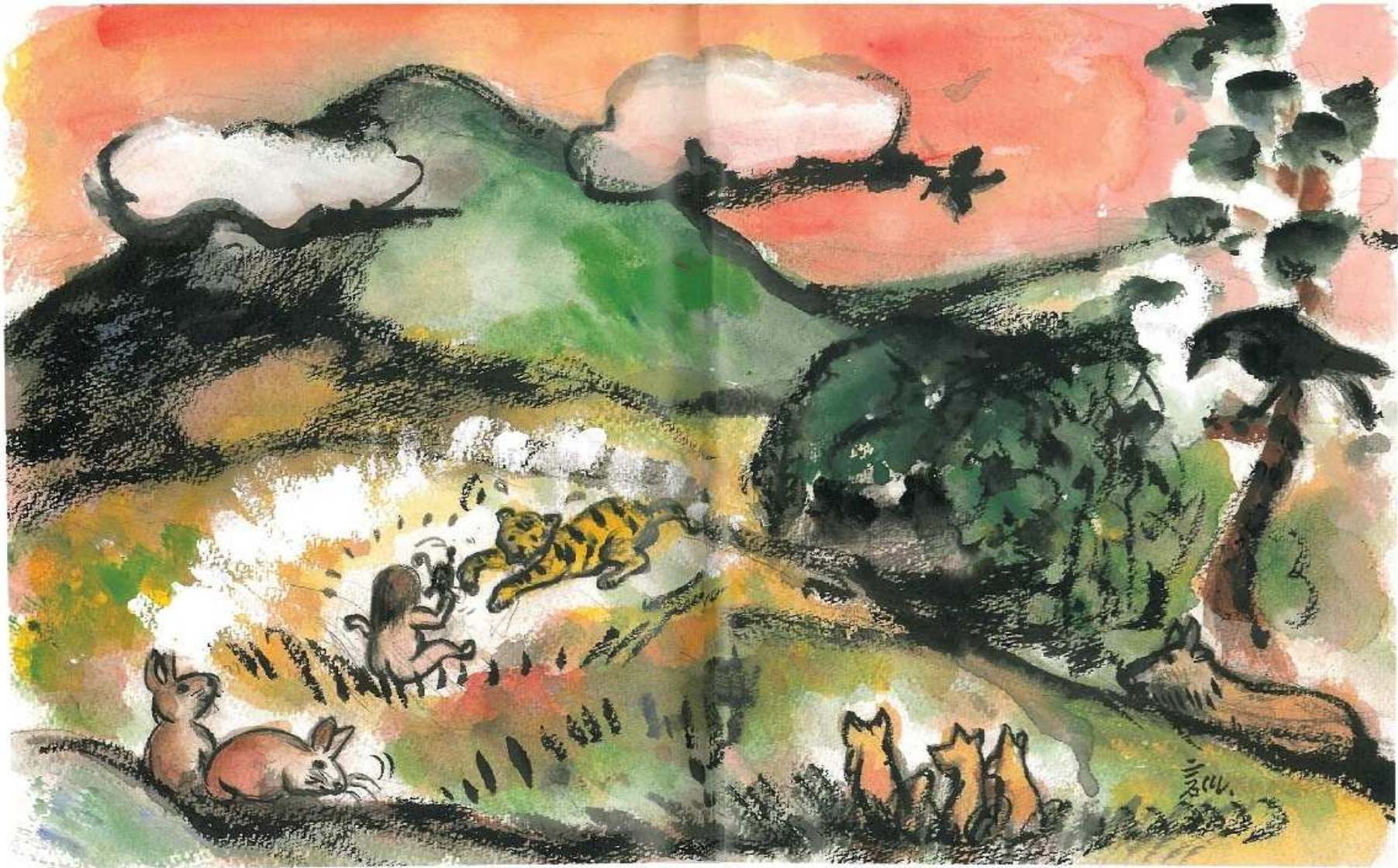
昔々、荒谷向かいの古い県道ぞいのところの山あいから清水がわいていました。この場所は、戸田方面から伊保内の市田に来る村人の、休む場所でもありました。こゝは化けもの小路とよばれ、すぐ上の山には、年よりきつねが住んでいて、ときどき市田帰りの人をだましていました。

あるとき、ほろよいきげんの村人が、この小路を通りかかりました。はるか小沢の方から、ちようちんがずらりとならんで見えました。その村人が「ほんになあ、今ばんきつねのよめ取りがある話だった。これこれひとつ見せてやると思いました。前にちようちん、

後ろに長持ちをかつぎ、そろそろ山根新田の方へ行列が向かいました。よめを取る家では、がんがり明かりがついて、台所ではそばハットをにており、庭のすみにはぶろがわいていました。ちようごよい湯かけだったので、村人は、人先にぶろに入りました。やがて、まわりでガヤガヤ人の声があります。はっと思ったら、東の空から夜が明けはじめ、朝草かりの人が馬に乗って通っていました。村人は、よい気持ちでぶろに入っていたと思ったら、水たまりに入って、体じゅうでぶろだらけになっていました。ドットパニー

伝説

戸田虎舞の由来



時は奈良時代と言いますから、今から千四百年前も昔の話になります。南方から追われてきた絶滅寸前の虎は北上を重ねてきたのですが、津軽海峡に阻まれ余生をこの辺りで過ごしました。そのうちの一頭がこの戸田に住みつきました。年老いた虎でありましたが毛並みが良く金色に真っ黒な縞模様のある立派な虎でした。この虎は八幡様の裏山である小松鞍を住みかにしていました。ある日のことでした。妻ノ神の林と呼ばれる、

現在の旧戸田中学校の下の田んぼの辺りの大変寂しい所に、かわいい男の赤ん坊がむしろに包まれて捨てられていました。ところがこれを、就志森を根城にしながら工サをあさっている大蛇が見つけて、絶対の工サとばかりに大蛇は半身分も立ち上がり、赤ん坊に飛びかかろうとするその瞬間でした。藪がザザーとなったかと思つと疾風のごとく飛び出した虎が赤ん坊をさびつて、あつという間に向こうの陰に消えていました。



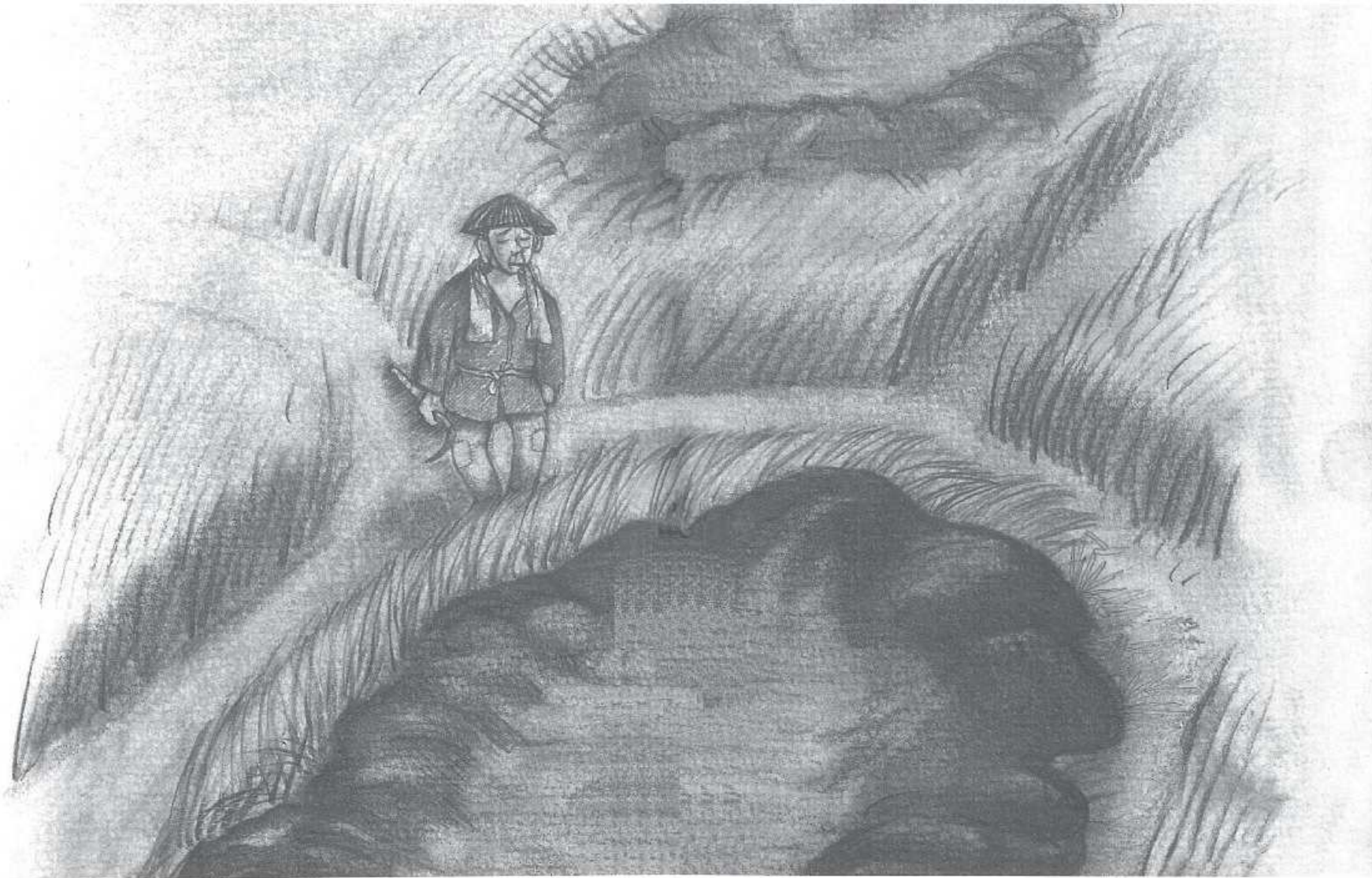
絵／高橋 訓子

それから五年位たった頃、小松鞍からガラガラという奇妙な音が聞こえるようになり、村人達は不思議に思っていました。そのころ虎は今まで育てた男の子が人を恋しがりとんなにあやしても泣きやまず困り果てていたのです。そこで男の子にガラガラと太鼓を鳴らさせて、それに虎がじやれて慰める毎日が続いていたのです。困り果てた虎は人間にその子供を返すことを思いつき、ある月夜の晩に背中に子供を乗せて、今の水車

小屋・いろいろ庵の辺りに来た時一声大きく吠えて男の子を振り落としかかと思つと、どこへともなく姿を消してしまいました。

やがてこの話が村じゅうに広まり、子供を粗末にすることは誰にも劣ると言われるようになり、子供を大事に育てる風習ができました。

そして後にこの虎を敬い、お祭りには虎舞を奉納するようになつたと言われてきました。



山根の川目の東側に、大小二つの山があります。右側の大きな山を筒木ノ内山、左の小さい方を天狗岳と呼んでいます。

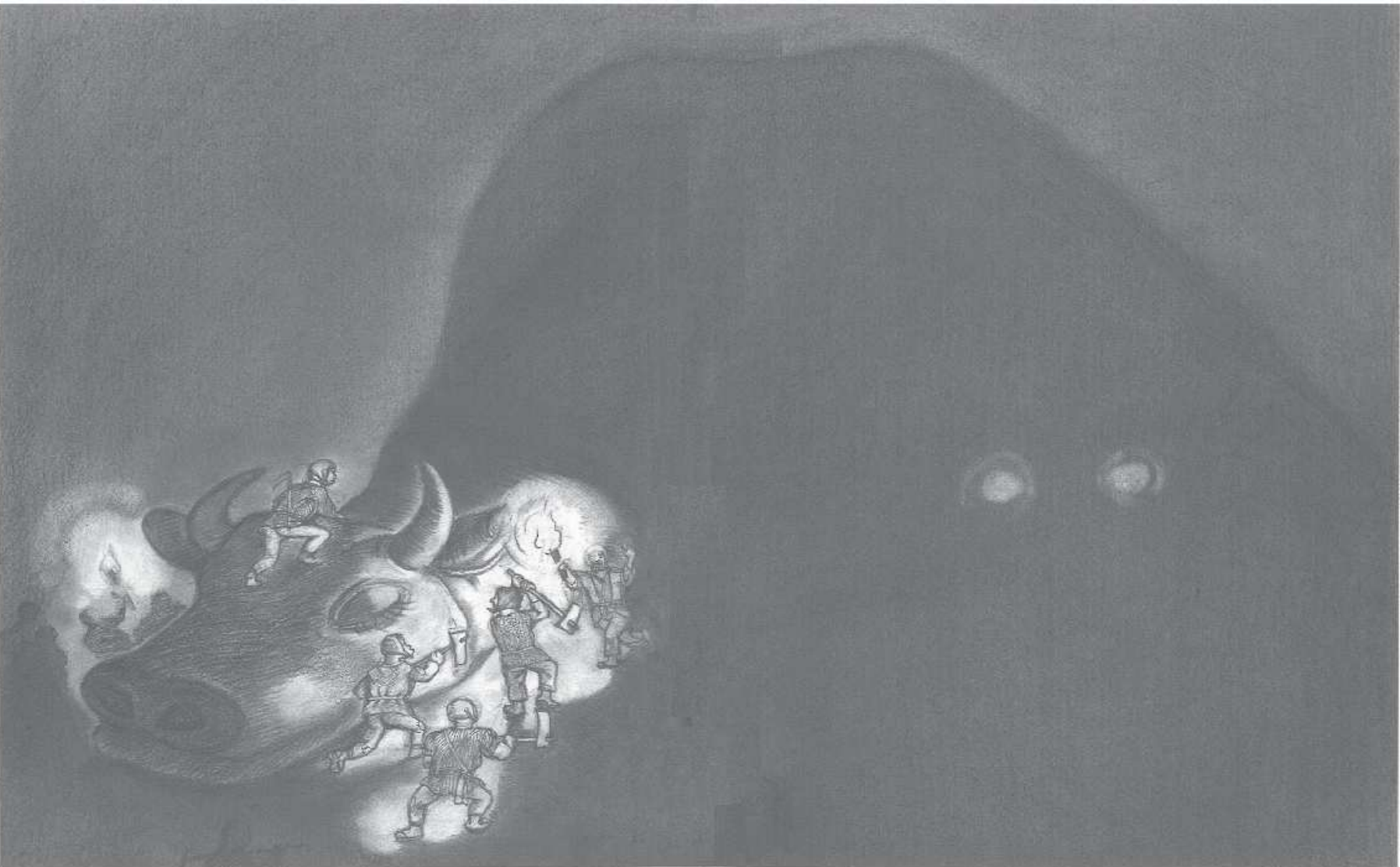
昔々、ある日、山のような大きな牛が、どこからともなくやって来ました。村人たちはあまりの大きさにびびり、息をひそめて早く出ていってくれるようにお願いしていました。しかし、大牛は、いつの間にかいく気配はなく、野山の草木を食いありし、作付けしたばかりの田畑で、毎日のように大あはれをしました。なんとか止めようとする者もいましたが、大きな角で、投げ飛ばされ、命を落とす者も次々と出てきました。

村人たちは、「このままでは作物を全部食われて、みんなうえ死にしてしまう」「いや、その前に、みんなあの牛にやられてしまう」「なんとかしなければ」と、毎日のように相談をしましたが、山のような大牛に成すすべもなく、このころでは女や子どもまで、この牛のきせいになるしまつです。村人たちは、人間の手にはどうしようもないことに気づき、ただ、一心ふらんに神様にいのりしました。すると、とつぜんおつけがあり「大牛がねむるある日の夜、全ての村人が協力していっせいに戦い、首を切り落とせばたいじでまるである」といふものでした。

ある日の夜、若者はもちろんのこと、女や子ども、老人まで、全ての村人は、手に手にくわやすき、おのやかまを持って集まりました。何せ、あまりにも大きく、人間の手には負えないような気持ちになります。が、勇気をふりしぼっておそろおそろ近づいて行きました。ソレッと命図で、ある者は鼻先に、ある者は足に、また、ある者はしっぽにと、いっせいにとびかかりました。くっすりねむりこんでいた大牛は、ビックリしてあはれ出しましたが、力を合わせて死にもぐるいで戦う村人に、どうすることも出来ずたおされてしまいました。

村人たちは、神様のおつけのとおりに、やっとの思いで、大牛の首を切り落としました。村は元の平和な村にもどりました。それから、村人たちは、神様へのかんじやの気持ちと、村中が協力することをおすすめしました。

村人にたいじされた大牛には、いつしか草木がおいしげり、山になっしまいました。その山が、今の川目の東側の山だといひ伝えられています。左側の小さな三角の山は天狗岳が、大牛の頭の部分です。右側の大きな間木ノ内山がどうたいの部分です。そのふもとが、ちようとおなかの部分で、今でも、ちぶさにあたる場所から、大変おいしく、のめば長生きするといひわれている清水がわき出しています。また、天狗岳と間木ノ内山の間はくぼ地が首の部分で、今でも、その時切り落とされた所が、ほりのような形で残っています。





絵／伊保内高校第20回地域子ども読書会参加生徒

それでも馬の上の腰は静かなもので、「あちががキッネでがんす」と海ましています。「なにをぬかす。この魚ぬすつとめ。うちのオカタ(妻)があんな山の母を行くものか」別当がでなりつけますと、「お前さんのことが心配であんな山の中にもかえに行ったのに、それがほととのオカタにいじめることですか」と涙を流しました。

これには別当も弱って、かけつけた家の人々に、夕方妻が出かけたかたをいかにけたすねますと、たしかにちよつと田かけたといえます。待っていた妻は、夕方がお主の所に行ったがすぐ帰ってきたといいました。しかし、本当の妻がむかえに行つてゐる間に、キッネの妻が名主の所へ行って帰つてきたのかもしれません。

なあ、思ひまつたうすぢの中へ、別当をはじめ衆の人々は、「方で火をなげがな燃やしなから、二人の妻を見比へ入て懸案にくれました。何をたすねても二人

のいじりとは思ひこつた。」「強ひつた別当は、うらやましい事を思ひ出し、まてに連れてこさせたのです。子供はほほけまなごで二人の母を見比へていましたが、馬からおろされた方の母がにじりほほえみながら手をさしのべますと、その手をほほえみのけへ、黙つてはいてい壁の方に走りよりました。「それ、せいじだ」別当をはじめ衆の人々は、馬からおろされた方の女にとびついで、火の上にあぶりました。それでも、「なんたることなまの」とわめいていました。が、「うへ」正体をあらわして、死にもの狂いであはれまわり、うまやの裏の戸のわすかなまのまを押しあけて、逃げてしましました。そして、「寺沢の別当、引っぱりあぶりの大名入、コクワン、コクワン」とほえながら、とんで行ってしまいました。

高校生による九戸村地域子ども読書会20年の歩み

回(年度)	テキスト	日程・班・参加者	読書会関連の特記
第1回 (昭和55年度)	高沢賢治の童話 「やまなし」	S55.12.27~ 3班構成・村内6会場 児童 150名	・テキストはガリ版刷り ・紙芝居は九戸の民謡「オドテ様」 ・各自定期バスで移動
第2回 (昭和56年度)	「よだかの星」	S57.1.5~6 7班(36名) 14会場	・村教育委員会・村内小学校 ・子ども会育成会の協力体制が出来た。
第3回 (昭和57年度)	「雪渡り」	S58.1.7~8 6班(48班) 24会場	・中学生の参加もみられる ・新聞等のマスコミで報道される
第4回 (昭和58年度)	「虎十公園林」	S59.1.11~12 6班(46名) 24会場	・NHK「いわて630」が放送 ・全国学校図書館協議会全国大会で九重柙軒教諭発表 「学校図書館」59年1月号に掲載
第5回 (昭和59年度)	「どんぐりと山猫」	S60.1.11~12 6班(36名) 24会場	・IBCラジオとテレビ取材、テレビ「由美子のおもしろアイランド」 ラジオ「ザ・モーニング」で放送
第6回 (昭和60年度)	「狼森と筑森盗森」	S61.1.10~11 6班(42名) 24会場 児童 457名	・ボランティアスクール始まる。 ・自作の「啄木カルク」を始める。 ・教育振興運動集約集会で田浦諭教諭発表
第7回 (昭和61年度)	「ツェねずみ」	S62.1.9~10 6班(34名) 24会場 児童 460名	・第8回教育表彰を受賞 ・村の高齢者学級と連携をとり古老による語りを入れる ・岩手県学校図書館研究大会で澤昭博教諭発表
第8回 (昭和62年度)	「オッペルと象」 (自作影絵も同時進行)	S63.1.8~9 6班(37名) 22会場 児童 470名	・岩手県教育委員会「ふれあい教育賞」を受賞 ・1、2年女子も参加 ・テレビ岩手「ニュースアイ」で放映
第9回 (昭和63年度)	「祭りの晩」 (自作影絵も同時進行)	H1.1.9~10 6班(55名) 22会場 児童 504名	・IBCテレビ「5ing」ハイスクール通信で放映 ・テレビ岩手の取材「ニュース・プラス1」で放映
第10回 (平成1年度)	「紳士とつきね」 (自作影絵も同時進行)	H2.1.8~9 6班(43名) 22会場 児童 467名	・NHKテレビで2日間わたり放映
第11回 (平成2年度)	「注文の多い料理店」 (自作影絵も同時進行)	H3.1.8~9 6班(43名) 22会場 児童 462名	・特別養護老人ホーム「折爪荘」慰問を始める ・二戸地区生徒指導連絡協議会で小原由美教諭発表
第12回 (平成3年度)	「月夜のけだもの」	H4.1.7~8 6班(43名) 23会場 児童 455名	・特別養護老人ホーム「折爪荘」慰問
第13回 (平成4年度)	「ふたごの星」	H5.1.6~7 6班(57名) 23会場 児童 418名	・特別養護老人ホーム「折爪荘」慰問
第14回 (平成5年度)	「かえるのゴムくつ」	H6.1.6~7 6班(52名) 23会場 児童 408名	・特別養護老人ホーム「折爪荘」慰問 ・NHK「いわてぐるっと59」に生徒2名が出演 ・教育振興運動集約集会で佐野茂樹教諭発表
第15回 (平成6年度)	「気のいい火山弾」	H7.1.6~7 6班(40名) 23会場 児童 577名	・特別養護老人ホーム「折爪荘」慰問
第16回 (平成7年度)	「ねこの事務所」	H8.1.9~10 6班(50名) 23会場 児童 576名	・特別養護老人ホーム「折爪荘」慰問
第17回 (平成8年度)	「どんぐりと山猫」	H9.1.9~10 6班(50名) 23会場 児童 495名	・特別養護老人ホーム「折爪荘」慰問 ・テレビmltスーパータイムで放映 ・岩手日報社が「ズームインいわて」で特集記事を掲載
第18回 (平成9年度)	「オッペルと象」	H10.1.8~9 6班(52名) 23会場	・特別養護老人ホーム「折爪荘」慰問 ・参加者を全生徒から希望者を募集した。
第19回 (平成10年度)	「注文の多い料理店」	H11.1.7~8 6班(59名) 23会場 児童 452名	・特別養護老人ホーム「折爪荘」慰問 ・紙芝居は、地元の愛好者に下絵見本を依頼し「オドテ様」として復活させた。
第20回 (平成11年度)	「よだかの星」	H12.1.6~7 6班(41名) 23会場 児童 424名	・特別養護老人ホーム「折爪荘」慰問 ・紙芝居は「バッテリー沢のキツネ」を新に製作「オドテ様」と2つ実施

んで歩いていました。
しほろく行くくと、小川の流れて大根を洗っている女がおりました。大黒様は、大根を食べたら毒になるのだかと思ひ、大根一本下さいと頼り出ました。女は邪険にも、この大根は主人に「口につかて洗っていますから差し上げる歌には参りませんと断りました。大黒様は、この大根を食べたら助かるのだが、おやきながらうめしをうめしに見ていたら、又大根が口につきました。その二又大根の一又を分けて下さらぬかと頼り出ました。女もふびんと思つたのでしよう。これなら支障はないと言つてもきこつて与えてくれました。それを食べて大黒様は命が助かったということでありませう。ドットバライ

(二)の話は、県北二帯にあるお話です。



赤沼のめどつ
江刺家の下、同道340号橋に架橋の丸木橋上流西方約百メートルの地点に赤沼という沼が瀬川内川沿ひにあります。昔は、かなり深い大きな沼だったそうですが、今は辺りに雑木が生い茂り埋まつて、半分位に狭小になったとのこと。赤沼すくすくの西側新庄老翁の中に、赤沼大明神という社があつて、白濁大明神と呼ばれています。
この赤沼に、めどつの上が棲んでいました。沼はかなり深しので、夜分は気まのよい人でないと通れません。日照りには、赤沼の水をかいれば必ずお掛けの雨が降つたと

伝えられています。昔は、江刺家下村部善七十戸の奥家被出で水をかい、引き続き折爪山頂権現堂に登り、雨乞のお祈り上げたといひます。日支那が勃発して間もないある日のこと、赤沼をかき下したら沢山の鯉や鯉がとれたが、めどつのは全く見えませんでした。因みに、赤沼大明神祭は毎年六月田植え上りがりだといひ。

まさかり沢の鯉
伊保内のツツ家、近頃沢取明氏の先祖に、大層放談に長けたお爺さんがあつた。その名も「鉄砲」といふ異名をとつたといひ。ある日のこと、爺さんが魚釣りに出た。釣り上げた魚が、後ろに好意していた鬼の背中へぶつた。鬼がドテンして山の崖を這い上がろうとしてもがいた。そうしたら「ホド」がごろごろと雨だ。鬼はたいて捕る。「ホド」は取る、魚は取る。一度になんと三色も大取獲したといひ。また、お爺さんが魚の腹がしらに鯉が来て、作物を食い荒らし困つてた。何とか捕まえてよつと煮たあげく、名案が浮かんだ。早速、焼酎に大豆をつけて、あたりにバラ撒いておいて。そうしたら食べた鯉が酔つぱらひ、ごろごろと飛ぶようになった。それを眠に入れ家を持ち帰つた。そのまま尾先においたら、吠えしめないのが運の尽き。鯉が酔ひ醒め元の空吠になつてた。ドットバライ

誠志翁の隠居
戸田の平内四方の誠志翁という高い山がある。この山は西の三方界で、東はわが九戸村、西は西南が無常町で、西北は二戸町である。昔々、この誠志翁の西南七滝沢のかしらに密入殿があつた。ここに天下の馬の大根様がお

つた。水と近頃の放牧馬の糞を積み、この隠居において飼育し、いざ急戦といふとき売却し大儲けしていたといひ。また北西方の積石の断崖下の深い河沼周辺には数多くの鯉が棲息し村人をたましていた。ある年のこと、冬部高田某の美女が突然行方不明となつた。捜索したが見つからず、数年後に積石で白骨死体のそばにその娘の真體が並んであつたといひ。

戸田の河童の話
戸田のある部落で、今より三代位前の主人の若妻が河童の子を生み産したといひ。この河童が夜々夜々美女の手に抱かれて若婦人全たますでた。この婦人は夕暮れになると瀬川内川の瀬に洗濯するといひつて出かけるのでした。ある夕暮れ時、河童が美女の手に抱かれて、ジーンと若婦人の住家の方を見つて手拍きをしてた。若婦人がこれに気付かず、水を洗んでくると言つて瀬川内川へ出かけるのでした。いつしかこの若婦人が返つてしまひ、目目が落ちて出家が間近となつて来た。しかし家人がどうも様子がおかしいので、浦首を頼み家中を覗つてもらつた。

浦首が驚きを振り直し大声を出した。すると庭がらしては化物がクッククックと叫ぶ音がした。庭床では若婦人が、口が裂け面にも赤いかきを散つた河童の子を踏み踏んでた。浦首が後の祟りをなくすため赤飯を炊かせ、化物に七首を喰わさせて川に流してやつたといひ。

九戸村長 伊保内 昭一

私たちの先祖である人類が、北と山系の大地、ここ九戸の里に住み始めたのは、今から数万年前のことです。

言葉を持たず、文字を持たなかった時代から、気の遠くなるような時間を経た今日まで、私たちの先祖はこの雄大な自然の中であって、物言わぬ万物と心の語り合いを続けて参りました。

折爪岳は、今と同じく、この里に春をよび、深い緑に人々を誘い、紅葉の錦でいつとよきの賑わいをもたらし、荒れ狂う吹雪で人々の邪念をこらしめ、来る年も来る年も近づく者に奥深い畏敬の念をいだかせ続けてきました。

瀬月内川の流れば、太平洋から鮭や鮎などの良質蛋白を人々のもとに運び、ある時はきらきらと陽光に輝かせせのきとなり、ある時は怒涛の洪水となり、ある時は青緑に沈む淵となって、人々の心に、仲良くやっっているかと語りかけてくれました。

自然は時に、天狗やキツネやカッパなどを使いとして、人間との交流を続けてきましたが、このおつき合いはいつも不思議に、双方納得すくのかみとなるのです。

二十一世紀を迎える今、私たち編集委員会は、これらの語らいを夫しくまらめ、保存しようと考えました。

お話を提供して下さいました皆様、心を込めて挿絵を描かれた美術集団「風車」の皆様、伊保内高校ボランティアの皆さんに、心から御礼を申し上げ発刊のごあいさついたします。

絵本九戸村の民話編集委員長
岩手県立伊保内高等学校校長 及川 征一

九戸村の民話の発刊にあたり、編集委員の方々をはじめ、ご協力を賜りました皆様からお礼申し上げます。

さて、子どもたちの活字離れが課題となっている中、国会は国連の「子どものための世界サミット」の誓いを受け、昨年八月、西暦二〇〇〇年を「子ども読書年」とすることを全会一致で決議し、子どもたちの読書活動を積極的に支援することにしました。

私も様々な機会に読書の必要を訴えて参りましたが、子どもたちは、木とふれあうことによって言葉遊び、感性を培い、表現力を高め、創造力を養いながら、心豊かな人間性を育んでいくものと思います。

読書好きの子どもを育てるきっかけは、良い本との出会いもありますが、幼い頃の本の読み聞かせがなにより大切だと思います。

そのような意味から、身近に伝わる民話を絵本として発刊することは、子どもたちの読書を推進する上で誠に意義のあることです。また、失われようとしている民話を保存し後世に伝えていくことも極めて大事なことであります。

最後に、九戸村の民話の発刊にあたり、編集に大ごさわった皆様、二〇〇一年にわたって地域子ども読書会を続けてきた伊保内高校の生徒の皆さんに重ねてお礼を申し上げますとともに、この絵本が、それぞれの家庭で大切に読まれることを期待いたします。

ごあいさついたします。

九戸村の民話

発行日	平成12年3月	絵本「九戸村の民話」編集委員
編集	絵本「九戸村の民話」編集委員会	及川 征一 岩手県立伊保内高等学校校長
挿絵	九戸村美術集団「風車」	大久保 茂 九戸村立堂口小学校校長
発行	伊保内高校地域子ども読書会参加生徒	渡 フヂエ 九戸村立伊保内保育園長
	九戸村教育委員会	古館 保男 九戸村文化財調査委員
	〒028-6502	伊保内啓子 九戸村社会教育委員
	岩手県九戸郡九戸村大字伊保内10-11-6	高橋 訓子 美術集団「風車」代表
	電話 0195-42-2111	松澤 則雄 美術集団「風車」
印刷	川口印刷工業株式会社	上村 美雪 小学生を持つ母親
	〒020-0841	国久 律子 保育園児を持つ母親
	盛岡市羽場10-1-2	佐々木弘志 九戸村教育委員会教育長
	電話 019-632-2211	田村 繁雄 九戸村公民館長
		木村 正樹 教育委員会社会教育課長
		滝谷 博 教育委員会社会教育課長補佐

この絵本は九戸村地域子ども読書会20周年を記念し、宝くじの助成を受けて制作したものです。